

発掘調査の様子



STEP
1



縄文人の道具がどこから見つかったのかを記録しながら掘り進めて行きます。移植ゴテや両刃鎌を使って丁寧に掘り下げていきます。少し掘っていくだけでもたくさんの縄文土器や石器がみつかります。大きい破片や小さい破片、古いもの新しいもののが混じっていることが分かります。



STEP
2

よく土の断面を確認すると色や硬さや、混じっている炭や骨の量が異なることに気づきます。縄文人が長い時間をかけて土を盛ったことがわかります。これらを測量の道具を用いて図面として記録することも大切な調査の1つです。

現場公開・情報発信



子ども発掘

小中学生向けの発掘体験講座を開催しています。



縄文の音遊び

人間教育学科のサポートのもと、土器の音韻とともに自然の素材を使って、音遊びをしました。



学園祭展示

学生による手作りパネルで調査の成果を発表しました。



現地説明会

発掘調査の現場を地元の人々と研究者に見てもらいます。

Nakanehachiman Research Project

Facebook モチェックしてね！
www.facebook.com/nakanehachiman/

中根八幡遺跡学術発掘調査団

(国学院大學栃木短期大学・奈良大学)

〒328-8588 栃木県栃木市平井町 608

編集：国学院大學栃木短期大学考古学研究会

空中写真撮影：国学院大學考古学研究室

2020.3.1



栃木市中根八幡遺跡

Nakanehachiman Research Project

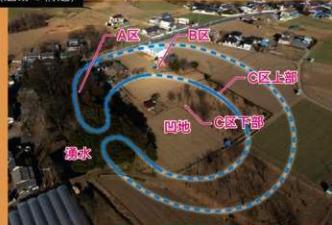


中根八幡遺跡学術発掘調査団

中根八幡遺跡とは

栃木市南部の渡良瀬遊水地に連なる湿地に面した直径約120mの環状盛土遺構をもったムラの跡です。環状盛土遺構は、小山寺市寺野東遺跡で初めて発見され、国指定史跡として保護・整備されていますが、その後は埼玉県や千葉県を中心に発見がつづいています。この遺構が構築された当時、関東の縄文文化は洗練された加曾利B式・安行式とよばれる土器、山形土偶やミミズク土偶、精巧な透かしの入った耳飾などをもった最盛期を迎えますが、やがて終焉を迎えて、北関東は独自の弥生文化へと変化していきます。中根八幡遺跡の環状盛土遺構の始まりから終りを調べることで、この地域の大きな変化の様子を探りたいと、國學院大學栃木短期大学と奈良大学が共同で2015年から学術調査を行っています。

〈遺跡の構造〉



遺跡の底下には豊富な湧水があり、これに向かって開いたドーナツ状の高まりが環状盛土遺構です。一部削平されていますが、縄文人が築いた盛土の姿をよく残しています。この高まりの部分に家を設けて暮らしていたとの推定されます。

〈環状盛土遺構の分布〉



B区の調査

上層が削平されていてA区のようなロームの盛土の痕跡は確認できませんが、大きな土坑（穴）や、柱穴を確認しました。大型土坑からは後期中葉（約3500年前）の土器が出ています。

動物装飾

B区で採集されたので、耳を張りだした土器のからぬの部分です。動物形土器にいたる進化が起きた動物形土器製品のいずれかと想定されます。



現代の植え込み
柱穴
火葬場跡
大型土坑

C区の調査



埋設土器

現存高60cmの大形の土器を地中に埋めました。中から骨片が出土しており、子供の墓の可能性があります。



中央窪地部分のC区下部では、縄文時代の黒色土層はほとんど発見できませんでした。おそらく中世以降にこの地に立てられた寺院の造成で削られたものと思われます。

東側の高まり部分であるC区上部でも、A区同様の盛土の存在が予想されました。しかし実際には、地表から50cmほどで関東ローム層が発見されました。東側はもともとの地形が高くなっていたことがわかります。周囲には縄文時代後期・晩期の土器が多く散在しているので、縄文時代にはそれらを含む盛土があったものが、後世に削られた可能性もあります。

2019年度の調査では、最も高い部分から縄文時代後期後葉（約3300年前）の柱穴や注口土器を伴う土坑、やや低い箇所から後期初頭（約4300年前）の埋設土器、さらにその下から中期後葉（約4700年前）の土坑など、長期間の生活の累積を確認しました。

注口土器

東北地方の特徴である丸い貼り彫りをもった土器で、下半分のみが、土坑から逆位で出土しました。

A区の調査

これまで湧水に近い斜面側のA区を調査してきた結果、現在の地表から約2m下に、この地域の基盤層である、黄色い関東ローム層が見つかりました。この上に多量の縄文土器を含む黒色土層が堆積していますが、中程にはローム層に似た黄色い土が広がっています。

そこで、火山灰考古学研究所を委託して分析を行ったところ、年代の異なる縄文時代以前の複数の火山灰が混じっていることがわかり、縄文時代晚期の人々が周囲の関東ローム層を掘り、この場所に盛土したものと推定されました。



土偶

土偶の人体ですが、詳しいことはわかれていません。全身が残ることは少なく、これらの頭の部分を中心とした破片です。

耳飾

ピアスのように耳たぶに孔を開けてつけるものです。複数の無いものもありますが、中には非常に精巧な透かし彫りをしたものもみられます。

独鉛石

矛を象徴化したもので、儀式の道具またはリーダーの力を示すものと考えられています。仏教の独鉛石でいるのがその由来です。本例は片側が欠けています。

石錐

水中で網を垂らす錐です。網漁のあったことがわかります。

